

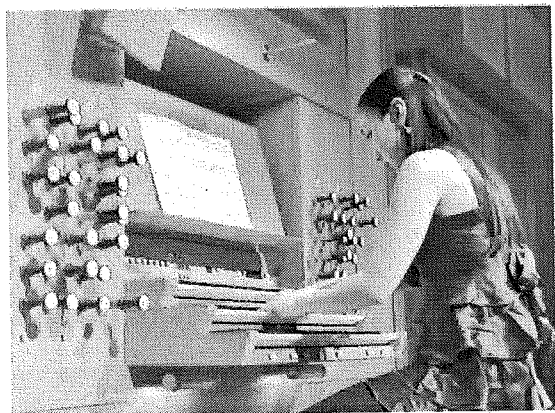
日本人オルガン奏者 躍進

日本人パイプオルガン奏者が欧州のコンクールで相次いで1位となり、注目を集めている。日本ではピアノやバイオリンなどと比べて、いま一つなじみが薄いのが、近年はコンサートも増えている。プームの最前線を行く若手を追った。
(松本良一)

プーム ムーブ

「オルガンの響きはスケールが大きく、ロック音楽のような熱がある」と話すのは、6月にドイツのニュルンベルク国際オルガンコンクールで1位になった福本茉莉(26)。62回を数える由緒ある同コンクールで日本人が優勝したのは、1985年の松居直美以来だ。中学からオルガンに親しみ、東京芸術大を経て現在はドイツ・ハンプルク音楽演劇大で学ぶ。「一

欧州のコンクール、相次ぎ優勝



武蔵野市国際オルガンコンクール本選で演奏する福本茉莉(写真提供・武蔵野文化事業団)

人でこんなになくさんの音色を作り出せる楽器はほかにない。聴き手がワクワクするような演奏を心がけています」



福本は2012年秋に東京で開かれた武蔵野市国際オルガンコンクールの優勝者。1988年から4年ごとに開かれているアジア唯一の国際オルガンコンクールで、昨年は入賞者5人のうち3人が日本人だった。「今後はコンサートを中心に欧州で活動を続けたい」と同じく6月にオランダ・アルクマールのシュニットガー国際オルガンコンクールで日本人初の1位になった北村あゆ美(35)も顔写真、本人提供は、大阪教育大で作曲を学んだ後、オルガンに転じ、ドイツのリューベック音楽大に留学中。「作曲の経験は即興演奏で大いに役立っています」

ドイツでは小さな町の教会にも必ずオルガンがあり、オルガン奏者は教会音楽家として独自の地位を持つ。教会の専属オルガニストをめざす北村は、「ここではオルガンはピアノ以上に身近な存在。人のために演奏する喜びを分かち合いたい」と抱負を語る。北村同様、リューベックで昨年9月に開かれたブクステフ



リュウベック・聖ヤコビ教会のオルガンを弾く大木麻理(写真提供・本人)

「国際オルガンコンクールで1位になった大木麻理(28)も、ドイツ・デトモルト音楽大に留学中だ。「特性の違うオルガンに行く先々で短時間で弾きこなすには、とにかく経験を積む必要がある。自分に合ったオルガンに出会えた時の喜びは大きい」

大木は9月27日に横浜の神奈川県民ホール小ホール、12月20日に東京・初台の東京オペラシティコンサートホールで、また福本は来年1月16日に東京・池袋の東京芸術劇場コンサートホールで、それぞれコンサートを開く。

ほかにも昨年のフランス・シャルトル国際コンクールで三原麻里が優勝するなど、日本人奏者が相次いで優れた成績を収めている。

オルガン奏者で聖徳大教授の松居は、若手台頭の理由について、「日本では1980年代以降、コンサートホールに立派な楽器が多数導入され、教会以外でオルガンを聴く機会が増えたことが大きい」と指摘する。

バツハからロマン派のメンデルスゾーンやレーガー、20世紀のメシアンまでオルガン曲のレパートリーは広く、多彩な作品を楽しめる。松居は「安い料金でオルガンを楽しめるランチタイム・コンサートなどで、気軽にオルガンの魅力に触れてほしい」と話す。